

外文語の  
社 説

○マニラへ援兵増派 マニラ反乱の征討援兵の先發隊が既に西班牙を發したる由は過日のマドリード近電に見えしが尙ほ次回の郵船は砲門、騎兵、銃丸四百箱を搭載して九月三十日に同國バーゼロナ港を拔錨しフイリッピン群島へ向ふ筈なる上に九月のクルップ砲六門を有する山砲隊も出征の用意なりしと云ふ又西班牙政府は該艦の士民を募りて騎兵隊を組織する爲め騎兵大佐を派遣する上に更に援兵増派の請求を受けし時は十個大隊を輸送するの準備を整へたるよし又別報に據れば去る九月上旬西班牙の國會に於てフイリッピン群島の反亂は二ヶ年以前より其陰謀を企てるものなるに總督を始め政府の之を悟らざりしは甚しき事慢なりと反対派の攻撃非常なりしと云ふ

○李鴻章と南北兩洋艦隊 天津に於て寧夏風説する所に據れば李鴻章は南北兩洋艦隊を統轄するの全權を清帝より委ねらる可しと云ふ

○マニラへ援兵増派 マニラ反乱の征討援兵の先發隊が既に西班牙を發したる由は過日のマドリード近電に見えしが尙ほ次回の郵船は砲門、騎兵、銃丸四百箱を搭載して九月三十日に同國バーゼロナ港を拔錨しフイリッピン群島へ向ふ筈なる上に九月のクルップ砲六門を有する山砲隊も出征の用意なりしと云ふ又西班牙政府は該艦の士民を募りて騎兵隊を組織する爲め騎兵大佐を派遣する上に更に援兵増派の請求を受けし時は十個大隊を輸送するの準備を整へたるよし又別報に據れば去る九月上旬西班牙の國會に於てフイリッピン群島の反亂は二ヶ年以前より其陰謀を企てるものなるに總督を始め政府の之を悟らざりしは甚しき事慢なりと反対派の攻撃非常なりしと云ふ

○李鴻章と南北兩洋艦隊 天津に於て寧夏風説する所に據れば李鴻章は南北兩洋艦隊を統轄するの全權を清帝より委ねらる可しと云ふ

後 女 武 者 わかば

第四十二回 酒窟

朝比奈三郎義秀は心様威くして、人を人とも思はざりけり、足柄山の火神として、我向ふ處にいかで妨をなし得べき、夜叉金剛の勇ありとも、捕つて押ふるに何暇取らん、火神鬼右衛門の細首土産に、北條梶原の鼻明させんと思ひ、巴の前が我身の上を配慮ふて、共に行かんと云ふ言葉を退け、「母君の御心遣ひは三郎身に取某の歸るを待たせ玉へ、暗母君」と、切に巴の前をはりたる三尺五寸無銘の薬物を背に負ひ、御所亂刃の匕首を腰に挿し、由ある武士の子の武者修行などの體へ從へず、われ自身に結束して、義父の義盛が賜ふるに桂ひ、酒匂馬入も打減えて、途を怪しさ小道に取り、足柄越の間道へと恐る頃は、秋の日の赤々と山の頂さも寂しき山道を、三郎義秀悠然として分け上る、元より今宵は露宿と定めて、強略路次を急ぐにあらす、一歩は一步と險しさ増せば、秋氣横はつて山際の風色益乾し身軽へ、人か黙かと打見やれば、猪の毛の皮裘を人々美に、眼の行く處悉くあれ活畫、山動き谷移る其風情に思はず眼を奪はるゝ半腹の邊、俄然として後ろに人の進音起り、此方を指して來るが如し「三郎丸はノツサ」と歩み出で、「小童止れ」とぞ呼びとむる。驚破ふを曲者、あれも火神の片破よ、先づ此奴をふを血保りにと、三郎義秀大に怒り、「止まれとは何の用ぞ見るから怪しき汝の形相、聞けば此山に火神といふを